水　道　事　業　会　計

１　業務状況

　　平成30年度の給水人口は155,013人で、前年度に比べ1,219人(△0.8％)減少、給水区域内人口は171,149人で、前年度に比べ1,370人(△0.8％)減少しており、普及率は90.6％で、前年度と同率である。

　　給水栓数は66,458栓で、前年度に比べ633栓(1.0％)増加、導・送・配水管の

総延長は1,252.2㎞で、前年度に比べ7.9㎞(0.6％)延びている。

　　総配水量は16,330,530㎥で、前年度に比べ406,763㎥（△2.4％）減少、有収水量は14,732,162㎥で、前年度に比べ173,018㎥（△1.2％）減少している。

　　これは、給水人口の減少や気候的要因により、水道使用量が減少したことによるものである。

また、有収率は90.2％で、前年度に比べ1.1ポイント上昇している。

業務実績

　業務実績は、下表のとおりである。

（注）　１　給水区域内人口とは厚生労働大臣の認可をうけ給水を行っている区域内の人口で、市外へ給水している

人口を含み、市外から給水を行っている人口を除く。（各年度末現在）

２　一人一日平均有収水量＝有収水量÷給水人口÷年間日数

３　無収水量とは、有効水量のうち料金徴収の対象とならなかった水量

（メーター不感水量、水道事業用や消防用等に使用）

４　職員数（各年度末現在）には、上下水道事業管理者は含まれていない。

５　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

２　予算の執行状況

1. 収益的収入及び支出（消費税込み）

各科目の予算の執行状況は、下表のとおりである。

　　 （単位：千円・％）



ア　収益的収入

予算額3,489,708千円に対し、決算額は3,605,823千円(仮受消費税238,212千円を含む)で、執行率103.3％、116,115千円の収入増である。

これは主に、営業収益及び特別利益が増加したことによるものである。

イ　収益的支出

予算額3,022,668千円に対し、決算額は2,879,261千円(仮払消費税84,175千円を含む)で、執行率95.3％、143,407千円の不用額が生じている。

これは主に、営業費用が減少したことによるものである。

収益的収入及び支出決算額の推移　　　　　　　　　　　　　　　　 (単位：千円)

（注）　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

⑵　資本的収入及び支出（消費税込み）

各科目の予算の執行状況は、下表のとおりである。

　　　　　　　（単位：千円・％）



ア　資本的収入

予算額511,778千円に対し、決算額は389,954千円（仮受消費税155千円を含む）で、執行率76.2％、121,824千円の収入減である。

これは主に、企業債及び工事負担金が減少したことによるものである。

イ　資本的支出

予算額2,094,921千円に対し、決算額は1,864,556千円(仮払消費税95,108千円を含む)で、執行率89.0％、翌年度繰越額153,906千円を差し引くと76,459千円の不用額が生じている。

これは主に、水道施設整備事業費が減少したことによるものである。

ウ　補てん財源

資本的収入額が資本的支出額に不足する額1,474,602千円は、減債積立金298,262千円、過年度分損益勘定留保資金1,081,387千円、当年度分消費税及び地方消費税資本的収支調整額94,953千円で補てんされている。

⑶　その他の事項

ア　企業債

　　　　　起債の目的、限度額、起債の方法、利率及び償還の方法は、予算の定めに従って

行われていた。

　　イ　一時借入金

　　　　一時借入金の限度額は400,000千円であるが、借り入れはなかった。

　　ウ　議会の議決を経なければ流用することのできない経費

この経費は職員給与費、交際費であり、他の経費との間における流用はなかった。

　　エ　他会計からの補助金

　　　　一般会計から水道つつじ公園の維持管理費として2,700千円が補助されている。

　　オ　たな卸資産の購入状況

予算に定められたたな卸資産の購入限度額は20,000千円で、購入額はその範囲内であった。

企業債（借入額）、償還金（元金償還額）及び未償還金残高の推移　　　　（単位：千円）

（注）　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

３　経営状況

経営状況は、下表のとおりである。

損益比較表　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（単位：千円・％）



（注）　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

純利益（純損失）の推移　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（単位：千円）

（注）　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

収益3,367,611千円に対し、費用は2,736,146千円で、631,465千円の当年度純利益が生じている。

前年度に比べ137,537千円(△17.9％)の減益である。

⑴　収益の部

収益の内訳は、下表のとおりである。

収益内訳表　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　　（単位：千円・％）



（注）　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

収益率の推移　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 （単位：％）

（注） 1　営業収支比率＝(営業収益-受託事業収益)÷(営業費用-受託事業費用)×100

2　総収支比率＝総収益÷総費用×100

3　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

ア　営業収益

営業収益は2,892,956千円で、前年度に比べ16,508千円(△0.6％)減少している。

これは主に、水道利用加入金が増加したものの、給水収益が減少したことによるものである。

イ　営業外収益

営業外収益は434,013千円で、前年度に比べ41千円(0.0％)増加している。

これは主に、下水道受託手数料及び他会計負担金が減少したものの、長期前受金戻入が増加したことによるものである。

ウ　特別利益

特別利益は40,642千円で、前年度に比べ118,710千円(△74.5％)減少している。

これは主に、退職給付引当金戻入益が減少したことによるものである。

総配水量に対する有効水量と無効水量　　　　　　　　　　　　　 　　（単位：㎥・％）

　（注）　1　有収水量は、年度当初の検針から年度末までの調定水量である。

なお、検針は市内を２つに分けて、２か月に１回の隔月検針である。

　　　　　 2　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

総配水量は16,330,530㎥で、前年度に比べ406,763㎥ (△2.4％)減少している。

有効水量は前年度に比べ262,942㎥（△1.7％）減少し、無効水量は前年度に比べ143,821㎥（△13.6％）減少している。有収水量は14,732,162㎥で、前年度に比べ173,018㎥（△1.2％）減少している。

用途別使用水量・料金収入比較表　　　　　　　　　　　　　 （単位：㎥・千円・％）



用途別では、前年度と比べ工場用で29,382㎥（4.3％）、金額にして7,285千円（4.4％）増加したものの、家庭用で112,948㎥（△1.0％）、金額にして18,043千円（△0.9％）、営業用で80,982㎥（△3.4％）、金額にして18,817千円（△3.4％）減少している。

⑵　費用の部

費用の内訳は、下表のとおりである。

費用内訳表　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　　（単位：千円・％）

　（注）　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

性質別費用内訳表　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　　（単位：千円・％）

　（注）　1　区分は日本水道協会「水道統計」に準拠した。

1111111112　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

ア　営業費用

営業費用は2,582,055千円で、前年度に比べ15,089千円(0.6％)増加して

いる。これは主に、総係費及び業務費が減少したものの、減価償却費、配水及び給水費が増加したことによるものである。

なお、受水費は671,443千円で、前年度に比べ44,508千円（△6.2％）減少している。これは、和田川及び子撫川受水費が減少したことによるものである。

イ　営業外費用

営業外費用は154,062千円で、前年度に比べ12,682千円(△7.6％)減少している。

これは主に、支払利息が減少したことによるものである。

ウ　特別損失

特別損失は29千円で、前年度に比べ47千円(△61.8％)減少している。

これは、過年度損益修正損が減少したことによるものである。

取水量の推移　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(単位：㎥・％）

　（注）　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

取水量は16,330,530㎥で、前年度に比べ406,763㎥（△2.4％）減少している。

このうち、和田川及び子撫川水源からの浄水受水量は15,645,756㎥で、前年度に比べ376,195㎥(△2.3％)減少している。

一方、佐野地内等の自己水源である地下水及び表流水の取水量は684,774㎥で、前年度に比べ30,568㎥(△4.3％)減少している。

⑶　供給単価と給水原価

供給単価と給水原価の比較は、下表のとおりである。

供給単価・給水原価比較表　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(単位：円)



（注）　1　全国平均は、総務省自治財政局編「平成29年度及び平成28年度地方公営企業年鑑」の給水人口15万人以上30万人未満の事業の数値

2　経常費用＝営業費用＋営業外費用

3　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

有収水量１㎥当たりの供給単価は189円18銭で、前年度に比べ13銭増加、給水原価 は

163円82銭で、前年度に比べ1円70銭増加しており、1㎥当たり25円36銭の利益が生じている。

４　財政状況

資産、負債及び資本の内訳は、下表のとおりである。

主要勘定貸借比較表　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（単位：千円・％）

　（注）　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

⑴　資産の部

資産の内訳は、下表のとおりである。

資産内訳表　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（単位：千円・％）

　（注）　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

有形固定資産明細書　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(単位：千円)



ア　固定資産

固定資産は27,190,242千円で､前年度に比べ167,306千円(0.6％)増加している。

これは主に、機械及び装置が減少したものの、構築物が増加したことによるものである。

また、投資は県営境川ダム建設出資金である。

イ　流動資産

流動資産は2,240,272千円で､前年度に比べ19,522千円(△0.9％)減少している。

これは主に、現金及び預金が増加したものの、前払金及び未収金が減少したことによるものである。

また、貯蔵品の状況について、たな卸検査を実施したところ適正に管理されていた。

未収金の状況　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(単位：千円)

　(注) 1　3月調定、5月納期分を含む

　　 2　（　　）内は件数

⑵　負債及び資本の部

負債及び資本の内訳は、下表のとおりである。

負債・資本内訳表　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(単位：千円・％)

（注）　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

ア　固定負債

固定負債は7,539,541千円で、前年度に比べ327,243千円(△4.2％)減少している。

これは主に、企業債が減少したことによるものである。

イ　流動負債

流動負債は850,927千円で、前年度に比べ50,123千円(△5.6％)減少している。

これは主に、企業債が増加したものの、未払金及びその他流動負債が減少したことによるものである。

　　ウ　繰延収益

　　　　繰延収益は6,963,913千円で、前年度に比べ141,542千円（△2.0％）減少している。

エ　資本金

資本金は13,139,462千円で、前年度に比べ997,395千円(8.2％)増加している。

オ　剰余金

剰余金は936,671千円で、前年度に比べ330,703千円(△26.1％)減少している。

これは、当年度未処分利益剰余金が減少したことによるものである。

５　他会計負担金等の状況

一般会計からの負担金、出資金等については下表のとおりである。

（単位：千円・％）　

（注）　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。

他会計負担金等は74,912千円で、前年度に比べ21,038千円（△21.9％）減少している。

このうち収益的収入は22,641千円で、18千円（0.1％）増加し、資本的収入は52,271千円で、21,056千円（△28.7％）減少している。



７　経営分析

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 分　析　項　目 | | | 30年度 | 29年度 | 28年度 | 全国平均(29年度) | 算　　　　　式 | | | | | | |
| 構　成　比　率 | 固定資産  構成比率 | ％ | 92.4 | 92.3 | 92.3 | 87.5 |  | 固　定　資　産 | | ×100 | | | |
| 固定資産＋流動資産＋繰延資産 | |
| 総資産の固定化の度合いを表すもので、比率の低い方が望ましい。 | | | | | | | | | | |
| 固定負債  構成比率 | ％ | 25.6 | 26.9 | 28.8 | 27.3 |  | 固　定　負　債 | | ×100 | | | |
| 負債・資本合計 | |
| 固定負債と総資本との割合を表すもので、比率の低い方が望ましい。 | | | | | | | | | | |
| 自己資本  構成比率 | ％ | 71.5 | 70.1 | 67.8 | 68.7 |  | 資本金＋剰余金＋評価差額等＋繰延収益 | | ×100 | | | |
| 負債・資本合計 | |
| 総資本のうち自己資本の占める割合を示したもので、比率の高い方が望ましい。 | | | | | | | | | | |
| 財　務　比　率 | 固定比率 | ％ | 129.2 | 131.7 | 136.1 | 127.5 |  | 固　定　資　産 | | ×100 | | | |
| 資本金＋剰余金＋評価差額等＋繰延収益 | |
| 固定資産と自己資本との割合で資本固定化の程度を示すものであり、100％以下であることが望ましい。 | | | | | | | | | | |
| 固定資産対  長期資本比率 | ％ | 95.1 | 95.2 | 95.5 | 91.2 |  | 固　定　資　産 | | ×100 | | | |
| 資本金+剰余金+評価差額等+固定負債+繰延収益 | |
| 固定資産と長期資本との割合で資本固定化の程度を示すものであり、100％以下であることが望ましい。 | | | | | | | | | | |
| 流動比率 | ％ | 263.3 | 250.8 | 228.6 | 307.8 |  | 流　動　資　産 | | ×100 | | | |
| 流　動　負　債 | |
| 企業の支払い能力を見るもので、この比率が大きいほど支払い能力が高いとされている。 | | | | | | | | | | |
| 回　　転　　率 | 自己資本  回転率 | 回転 | 0.1 | 0.1 | 0.1 | 0.1 |  | 営業収益－受託事業収益 | | | | |  |
|  |  | 期首自己資本＋期末自己資本 | |  | |  |
| ２ | |
| 自己資本の働きを観察したもので、数値が大きいほど資本が効率的に使われていることを示す。 | | | | | | | | | | |
| 流動資産  回転率 | 回転 | 1.3 | 1.3 | 1.3 | 0.8 |  | 営業収益－受託事業収益 | |  | | | |
|  |  | 期首流動資産＋期末流動資産 | |  | |  |
| ２ | |
| 流動資産の使用利用度を表すもので、数値が高いほど運用形態が良好なことを示す。 | | | | | | | | | | |
| 未収金回転率 | 回転 | 8.4 | 8.5 | 8.4 | 7.8 |  | 営業収益－受託事業収益 | |  | | | |
|  |  | 期首未収金＋期末未収金 | |  | |  |
| ２ | |
| 未収金の回収度を測定するもので、数値が高ければ未収金の回収速度が良好なことを示す。 | | | | | | | | | | |
| 収　　益　　率 | 総収支比率 | ％ | 123.1 | 128.1 | 125.4 | 113.8 |  | 総　　収　　益 | | ×100 | | | |
| 総　　費　　用 | |
| 総収益と総費用の割合で営業活動の能率を表すものであり、比率の高いほうが望ましい。 | | | | | | | | | | |
| 営業収支比率 | ％ | 112.0 | 113.3 | 115.3 | 105.9 |  | 営業収益－受託事業収益 | | ×100 | | | |
| 営業費用－受託事業費用 | |
| 総収益と総費用との割合で、営業活動の能率を表すものであり、比率の高いほど経営状況が良好なことを示す。 | | | | | | | | | | |
| 総資本利益率 | ％ | 2.0 | 2.1 | 2.2 | 1.4 |  | 当年度経常利益（損失） | | ×100 | | | |
|  |  | 期首総資本＋期末総資本 |  | |  | |
| ２ |
| 経常利益と総資本との割合で、企業全体の収益性を表すものであり、比率の高い方が望ましい。 | | | | | | | | | | |

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 分　析　項　目 | | | 30年度 | 29年度 | 28年度 | 全国平均(29年度) | 算　　　　　式 | | |
| そ　　　　　の　　　　　他 | 料金収入に対する  職員給与費 | ％ | 9.7 | 10.7 | 11.1 | 12.5 |  | 職　員　給　与　費 | ×100 |
| 給　水　収　益 |
| 給水収益に占める職員給与費の割合であり、比率の低い方が望ましい。 | | | | | | |
| 料金収入に対する  企業債利息 | ％ | 5.5 | 5.8 | 6.3 | 5.6 |  | 企　業　債　利　息 | ×100 |
| 給　水　収　益 |
| 給水収益に占める企業債利息の割合であり、比率の低い方が望ましい。 | | | | | | |
| 料金収入に対する  企業債償還金 | ％ | 18.6 | 17.4 | 17.0 | 19.9 |  | 企　業　債　償　還　金 | ×100 |
| 給　水　収　益 |
| 給水収益に占める企業債償還金の割合であり、比率の低い方が望ましい。 | | | | | | |
| 職員１人当たりの  営業収益 | 千円 | 65,535 | 61,779 | 57,989 | 68,088 |  | 営業収益－受託事業収益 |  |
| 損益勘定所属職員数 |
| 職員１人当たりの労働生産性を示すものであり、数値が高いほど効率的な経営であることを示す。 | | | | | | |
| 有収水量１㎥当たりに対する職員給与費 | 円 | 18.3 | 20.1 | 20.9 | 21.1 |  | 職　員　給　与　費 |  |
| 有　収　水　量 |
| 有収水量１㎥当たりに占める職員給与費を示すものであり、費用構成比と併せて見ることで、効率化を図るべき項目かどうかを判断できるものである。数値が低い方が望ましい。 | | | | | | |
| 負荷率 | ％ | 89.4 | 74.9 | 86.0 | 88.9 |  | 一日平均配水量 | ×100 |
| 一日最大配水量 |
| 一日平均配水量が一日最大配水量に対してどのような割合かを示すものであり、この比率が高いほど効率が良いことを示す。 | | | | | | |
| 施設利用率 | ％ | 56.4 | 57.8 | 56.8 | 62.9 |  | 一日平均配水量 | ×100 |
| 一日配水能力 |
| 配水能力に対して一日平均どれだけの配水量が利用されたかを示すものであり、この比率が高いほど効率が良いことを示す。 | | | | | | |
| 最大稼働率 | ％ | 63.0 | 77.1 | 66.1 | 70.7 |  | 一日最大配水量 | ×100 |
| 一日配水能力 |
| この比率が高くなれば、配水能力を向上させる必要が生まれ、低くなれば、まだ能力に余裕があることを示す。 | | | | | | |

(注) １　各比率の算出方法及び計算の際に用いた基礎数値は、総務省自治財政局編地方公営企業年鑑の例による。

　　　 ２　全国平均は、総務省自治財政局編「平成29年度及び平成28年度地方公営企業年鑑」の数値である。

　　　　 ３　自己資本＝資本金＋剰余金＋評価差額等＋繰延収益

　　　 ４　総資本＝負債・資本合計

　　　 ５　職員給与費は、給料、手当等（児童手当は除く。）、法定福利費及び退職給付費（退職手当組合負担金は除く）の合計額である。

　　　 　６　平成28年度数値には簡易水道事業を含む。